

七草がゆのお接待で紡ぐ地域の絆（福井町）



季節の移ろいとともにも暮らす日本には月ごとにハレの日がある。その基本的な行事である五節句のうち、年の初めに迎えるのが人日（1月7日・七草の節句）。この日に「七草がゆ」を食べるとその年二年健康に過ごせるといわれ、行事食として一般に定着している。水精山多聞寺ではこの日に初会式が行われ、七草がゆが振る舞われている。

山肌に日が差し込む頃、檀家の世話人たちが寺に集まり始める。地元農家から七草が届けられると、さっそく料理に取りかかった。割烹着姿の女性たちが手なれた包丁さばきで七草を刻み、かまどでおかゆを炊いていく。里山に立ち上る一本の煙に導かれるように人々が集まりだし、境内はにわかに活気づいた。お椀から立つ湯気が、境内に若々しい七草の香りを運ぶ。「どうぞ、お召し上がりください」

ほんのり塩味のきいたおかゆをアツアツのまままでいただく。心も体も温まる至福の一杯に笑顔があふれた。



長年、総代会代表としてお世話をされてきた西條益生さん（77歳）に、七草がゆに込めた思いを聞いた。

「小さなお寺を守っていくためには、檀家が結束する必要があります。昭和63年に毘沙門堂を改築したことを祝い、始めたのがこのお接待です。続けること26年、一つの行事が伝統になりつつあります。少子高齢化が進むなか、伝統や文化の力を借りることで地域ににぎわいを創出し、世代を超えてつながり、絆を育む場にしていくと思ったらと思っています」

昨年12月4日、「和食 日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録された。世界にアピールした特徴の一つに「年中行事との関わり」がある。自然の恵みである「食」を分け合い、食の時間を共にすることで、家族や地域の絆を深め合うという習慣。七草がゆのお接待には、世界に誇れる「日本の心」が息づいている。

